
虹色の声

白黒音夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の声

【Nコード】

N7585U

【作者名】

白黒音夢

【あらすじ】

あらすじとか書けないっす……。

わたしが見つけたのは二つの人骨と一つの手帳。

そこに書き込まれていたのは、僕と彼女のお話だった――

(前書き)

文章レベルは低いけど見てくだされば俺は嬉しいです、・・・)

私は数十年前に作られたであろう一つの避難用シエルターを見つけた。同じ記者の仲間の数人と共に、中に入ってみる。

そこにあつたのは一つの手帳だった――

鼓膜を突き破るような音が僕の耳に届いた。縦に横にシエルターが揺れたけど、あらかじめ座っていたから、僕も彼女も転倒はしなかった。大きな悲鳴を上げて、体を預けてきた彼女を抱きしめながら、その音を聞いていた。音は止み、静寂が空間を包み込んだ。しばらくしてから、僕は彼女に声を掛けた。

「大丈夫？」

微動だにしない彼女。今度は華奢な肩を揺さぶりながら声を掛けた。

「ワカナ！」

僕の口から発せられた声が、この四角いシエルターの中を反響した。木霊する声が消えても、彼女はぴくりとも動かなかった。生きているか確かめるため、恐る恐る彼女の胸の上に手を当てた。彼女の柔らかな胸の感触が、僕の鼓動を早めた。そんな僕の早くなった鼓動とは無関係に、彼女の鼓動は規則正しく安定していた。あまりの恐怖に気絶してしまったのだろう。こんな体験はそうそう出来ない。というか、二度と出来ない。あと数分ほどシエルターに入るのが遅れていたら、僕たちは間違いなく死んでいただろう。その場合のことを考えると怖くなった。首をぶるぶると振って、気持ちを落ち着かせた。携帯電話をズボンのポケットから出して、電波の強度を見た。はやり一本も立っていない。数十年前から携帯電話は売ら

れていて、機能や性能がどんどん進化していった。だけど一時期その進化が停滞した。様々な会社が様々な機能を搭載するが、ドコモ似たり寄ったりだったらしい。そんなとき、政権交代したばかりの新政府が、とんでもない案を出した。

「地中でも、電波を！」

地中にも電波が発生するように国の総力を上げて工夫したらしい。電線を通してあるのか、大きな装置が地中に埋められているのか、僕は専門職ではないので具体的なことは分からない。とりあえず、通常の状態であれば携帯電話は使えるのだ。それが使えない今は、非常事態。

相変わらず彼女は寢息を立てていた。呼吸に合わせて薄い睫毛が揺れている。

——僕らの全てを書いておきたい。

そんな衝動に突き動かされた僕は、腰に着けていた青いポーチから分厚い手帳とシャーペンを取り出し、時間を忘れて書き始めた。

僕には好きなヒトがいる。その人は『虹色の声』と呼ばれるモノを持っていた。本人は覚えていないそうだけど、幼い頃からその声は人々を魅了していた。成長するに従って容姿も声も美しくなっていく、十代の後半頃には、人々を魅了するその声を『虹色の声』と呼ぶようになる。彼女が一度歌えば、鈴を振ったような、雲のない澄んだ青空の色を思わせる声で、どんな人間をも魅了していた。

例えば、こんな話がある。

とある外国では凶悪犯罪が多発していた。連続放火、撲殺して金を盗む。そんなことが日常茶飯事となっていた。それを憂慮した国のトップが彼女にお願いした。「人々の心が荒れて困っているのだ。

これ以上、亡くなる人も、犯罪を犯す人も、増えて欲しくない。是非わたしが治める国に訪問して欲しい」と。彼女は快くそれを引き受け、その国のTV放送で、演説（と呼べるほどすごい事は言っていないのだが）をして、彼女は一曲歌った。歌う直前まで柔和な笑みを浮かべていた彼女。肩まで伸びる髪が素敵だったのを覚えている。それはもちろん、彼女の近くに僕が居たからなのだけど。髪が一瞬、ふわりと揺れた。そして彼女は歌い出した。

貴方にだけ聞える　鳴り始めた短音は　「止まらないで」　祈ってみた

奇跡のような軌跡に　私は何を想うの？　「止まらないで」　頷いて見せた

全ての時が止まった。

彼女はしっかりとカメラを見据えて歌った。

彼女が歌い終えた後、誰も言葉を発せ無かった。その国では、その日から、彼女が歌い出した時刻から、犯罪が無くなった。そんな馬鹿な、と誰しもが思うであろう。でも本当なのだ。そんな話があるからなのか、彼女は、日本の一番大事な外交カードだそうだ。核ミサイルより何より、もっとも厳重なガードの下で普段は過ごしている。だからと言って監禁されているのではない。ただ、彼女と会う人物は、両親友人恋人職業。全て事前に調査されていた。その上、彼女に気付かれないように屈強な傭兵が何人も護衛していた。

『虹色の声』を彼女に授けた神様は一体何を考えていたのだろう。少しだけ説明する。

彼女の両親は彼女が生まれて間もない頃に事故で他界した。たまたま彼女は母方の祖母の家に預けられていたので不幸を免れた。両親が他界した事によって、父の姉——伯母の家に預けられる事になった。

そんな彼女に対して神様は更に不幸を与える。

心が洗われるような泣き声の持ち主として、既に名前は有名になっていた。連日のようにTV曲から取材が押し寄せ、かなりの額のお金が伯母の家には入っていた。始めの頃は彼女に色々還元していたようだが、だんだん彼女を金儲けの道具としか見なくなっていた。そして伯母は遂に逮捕される。幼い彼女の裸の写真を撮って、悪趣味な週刊誌に投稿したのだ。箱口令が敷かれたが、まあ、そんなものには意味がない。情報というモノは必ずどこから漏れるのだ。人間の口というのは恐ろしく軽いのだと、僕は幼心にして思った。そんな僕は、小中高と、ずっと彼女と共に成長をしてきた。その途中で様々な事を体験した。それを書くこうと思う。

僕らがまだ小学校に通っていたときの話しだ。小学校六年生。今にして思えば、もつとも最悪な頃だ。彼女は日本国民全員が名前を知っているくらいの有名人になっていた。そのときは、彼女の声を聞く心が癒される。虜になる。なんてことは知られていなかったし、実際、そんな力はまだ無かったのだろう。だから、ガードマンも付いてなかった。普通の生徒だった。

両親が事故で亡くなり、伯母が自分の裸体を撮影して捕まった。ということを除けば。

さきほど、『もつとも最悪な頃だ』と言ったけど、本当にそうなのだ。自分と、自分の周り、と、違うところがあれば、虐める。みんなが持っているゲームを、一人だけ持っていないければ、虐める。そういうところがある。いや、あった。

他者の意識を気にして、自分を作り上げる。

他者の意識を気にして、自分と周りを同化させる。

両親が居ないから、虐める。

犯罪者の身内だから、虐める。

ここまで言えば分かるだろうか？

彼女は虐められていた。

いつも通学している道の途中には小さな川があった。川と言えるのか微妙な深さだけれど、濁った水が流れている。その淀んだ水の底には泥があった。

僕はその日も普段と変わらなく、六時三十分には家を出て春日第三小学校へ向かっていった。田んぼがあちらこちらにあつて、時折、遠くだったり近くだったりから聞こえる鳥の声。のどかな風景だった。

ゆつたりと歩いていると彼女の声が耳に飛び込んできた。高いような低いような、綺麗な声。一度聞けば耳に残る、素敵な声。

「やめてよ……」

彼女ははつきりとそう言った。でも語尾は弱々しく、これじゃあ相手に付け入られるなあ。と僕は思った。

案の定。

「はあ？ なんもしてないぜ。俺たち——な？」

同じ学年の中で、通称大将と呼ばれている男子が、手下であるひよる長い男子に同意を求めた。どちらも僕より少しだけ背が高い。

「そうだよ。俺はただ間違えてぶつかっちゃっただけじゃないか」
手下が言う。柔らかな言葉とは裏腹に、そこには悪意がこもっている。

「なんで、いつもいつも……」

彼女は目に涙を浮かべて、苦しげに呟いた。

助けを求めようとしたのか、辺りを見回していた彼女は僕の存在に気付いた。目が大きく開かれて、キラリと濡れた瞼が光ったような気がした。遠いから錯覚かも知れないけれど。でも、十分だった。助けに行く理由なんてそれで十分だった。

彼女の側まで歩いて行った僕は、すぐに彼女を僕の後ろにやった。背中越しに彼女が小さな手で僕のシャツを握りしめているのが分かった。僕は虐められたことはないし、虐めたこともない。虐められ

るタイプではないが、だからといってケンカが強いわけではない。

でも、やらなきゃならない――

彼女から伝わる熱が、勇気をくれた。彼女だって怖いはずなのに、相手を拒絶する言葉を言った。『やめてよっ』って言葉に、一体どれだけの勇気が入っていたんだろう。そう考えると、怯えなんて少しもない。そして僕は言うんだ。

「何してるの？」

僕に出来る、精一杯の強がった表情。

「別に。ただ、こいつがぶつかっちゃっただけだっつて」

めんどくさそうに大将が言う。僕は怒りを抑えて告げた。

「そんなの、どうでもいいんだけど。そういうのやめてくれるかな？」

そう言うや否や、手下が僕に向かって突っ込んできた。

チラ見していた彼女は声を上げて少し離れた。

手下は拳を振り上げて僕の顔面を狙っている。同じように顔面に拳を入れようとする。けどどうしてもリーチが違うから、当たるのは僕だけだろう。小さい僕は相手の懷に飛び込むしかない。

ああ、怖い――手下の拳が当たるその刹那、僕は一步後ろに下がると同時に上体を反らした。紙一重で相手の攻撃を避けた。手下が真正面にいた。自分が今感じた恐怖を怒りや凶暴性に変える。ぐつと凝縮した何か僕を突き動かした。バネのように勢いよく頭を前に突き出し、相手に頭突きを喰らわせた。多分、相手の鼻だ。手下は呻き声を上げ、そのまま後ろに倒れた。

「どうする？」

僕は内心冷や冷やしながら尋ねた。

大将にこんな手は通用しない。喧嘩をしてきた場数が違いすぎる。僕が喧嘩慣れしていないことを悟られると非常に困るので、ポーカ―フェイスを装った。

「もう、手を出さないよ。それでいいんだろ？」

大将はそう言った。

「それはいいんだけど、なんで虐めてたの？」訊きたかったことだ。絡む理由が分からない。

「家族いねえし、一人だから狙いやすいんだよ。弱いし、女だし。それに犯罪者の身内だし」

大将はケラケラと笑っている。消えてしまった先ほどの怒りや凶暴性が再び芽を出す。黒い感情が体の中を駆け巡る。ブルツと体が震えた瞬間、下がっていた彼女が僕の腕を横から掴んだ。

「駄目だよ」分かっている。分かっているけれど。

「ごめん。我慢できないから。先に行つてて……？」

「……ちゃんと来てよね」

彼女は細い足を動かし、立ち去った。

「へえ。女を逃がして、何するつもりだよ？」

「うるさい」

黒の想いがそのまま口から出た。大将のこめかみが震えて、怒りで顔が真っ赤になる。この手の人間は自分より上から言葉を言われたことがないはずだ。そして冷静さを失った奴ほど弱いモノはない、と思っていたんだけど。

「……ざけんなっ！」

そう言つて舌打ちした大将は、ゴツイ体格と不釣り合いな早さで僕に迫ってきた。その早さに付いていくのがやっとだった。大将の拳が右の頬に当たる寸前、腕で顔を守った。腕にドスンと衝撃が襲つて、ジンと痺れたような痛みが走る。痛いけど、まだ戦える。そう思ったのも束の間。僕の腕を殴った拳とは反対の拳で、腹を殴られた。コレまで経験したことのない痛みだった。無意識に呻いた。がむしやらの腕を振り回して大将を殴ろうとするけど、ほとんど当たらなかった。

「雑魚じゃん」大将の笑った声が聞こえた。

「黙れよっ！」

腰を捻つて打ち出す僕の右拳。起死回生の一手。当たれば逆転。僕が全力で殴ろうとした拳を、まるでハエでも払うかのように払っ

た。重心がずれて、前屈みになる。そこで髪の毛を掴まれて、頬を殴られた。防御する間もなかった。何度も殴られて体から力が抜けた。抵抗する力さえない。大將が手を離れた。僕は膝を折って、手をついた。僕は横から蹴飛ばされて倒れ込んだ。大將が立て続けに腹に向かって蹴りを入れた。体中が痛かった。ごほごほと咳き込んでいると、酸味のある何かが胃からせり上がってきた。ドロドロとしたモノを吐き出してみると、それは朝食に食べたパンだった。口の中を切ったのか血が混じっていた。

「きもちわるい奴」

いつの間にか倒したはずの手下が側に立っていて、僕を見下ろしていた。鼻の回りには乾いた血が付いている。

「もう行こうぜ。こんな奴放っておいて」

一撃で倒れた癖に。と僕が思っていると、手下が重い蹴りを放った。唾に血が混じっているのか、血に唾が混じっているのか、咳き込みながら赤いモノを口から吐き出す。

考える力も低下している僕は、ぼんやりと空を眺めていた。疲れたのか、次第に眠気が襲ってきた。薄れていく意識の中で、大將が一言呟いて、二人が歩き出す気配を感じた。

「弱い奴……」

どれ程の時間が経ったのだろうか。一分か、十分か、それとも一時間か。

「……え……てよ」

体を揺さぶられる。全身が痛い。

「ねえっしたら……起きてよぉ！」

声と共に、真っ暗な場所から光が差し込んでくる。その柔らかな光を所々遮って映るモノがあった。彼女だった。陽光が髪を通過して、黒髪が茶色に見えた。僕は至る所から温もりに包まれていた。彼女の膝の上に頭を乗せられているらしい。

「……うん」

言葉がはつきりと出ない。ふうつと息を吐き出すようにして、僕はなんとか喋った。まだ口の中に酸っぱい味が残っている。

「大丈夫？」

僕の頭を撫でながら彼女は聞いた。僕は軽く頷いた。

「ごめんね……」

どうして謝るんだろう。首を突っ込んで火傷したのは、僕が弱かっただけなんだ。

「巻き込んだじゃった。あたしのことなのに……ごめんね」

彼女は目に涙を浮かべて苦しげに言った。

そんな顔しないでよ。どうして一人で戦おうとするの。なんで全部背負い込もうとするの。幼なじみじゃないか。ずっと一緒に居るんだから、なんか言ってよ。

言えない言葉を心の中で言った。

「違うよ」

違うんだ。巻き込まれてないし、彼女一人の問題じゃないんだよ。

「何が……？」

「側に居るんだよ」

コレしか言えなかった。全くもってトンチンカンな答え方だとは思う。でも、本心だった。僕が弱々しくそう言ったとき、意識が飛んでしまう前に聞いた言葉を思い出した。

『弱い奴……』

僕が弱いから喧嘩に負けた。そしてこの有様。誰か困っている人を守るだけの力があれば良いのに。こんな弱い自分が嫌になる。ヒーローに憧れる中途半端な僕。悔しくて、情けなくて、涙が流れてきた。本当にみつともなくて弱い奴だ。腕を目の上に置いて唇を噛み締めた。

「どうしたの？」

僕の頬を彼女の両手が包み込んだ。ひんやりとした手だった。涙が彼女の掌に当たる。

「ごめんね」

口から出ていたその言葉は、彼女にではなく、自分にだろう。泣いているときは、色んな感情が溢れ出してきて、どうしようもない気持ちになる。

「何が……？」

「弱くて……」

ひ弱な言葉ばかりが口から出る。こんなだから駄目なんじゃないか。

「も、もっと、強く……なるから、許して……」

しゃくり上げていた。涙声が小さく響いた。

「弱くなんかないよ」

彼女は真上で呟いていた。彼女を見ようとして、すぐに止めた。腕を退けると彼女に泣き顔を見られる。それだけは嫌だ。

「ごめん……」

最初から最後まで言葉は震えていた。

「良いんだよ」

その声が、その音が、何もかも許してくれる気がした。

数秒の後、胃液やら血やらが付着している僕の唇に、柔らかくて温かな彼女の唇が触れた。酸味の中に彼女の匂いが混ざる。

ドクンと心臓が大きく跳ねた気がした。

キスは、衝撃的だったなあ——なんて考えていると、彼女の呼吸の音が不規則になり、寝返りをうった。ごろんと転がったのだろう。僕の背中に彼女の腕が当たった。

その音が僕を現実に戻した。慌ててシャープペンシルを手帳に挟み、ポーチにしまった。何故か彼女には見せちゃいけないという気がする。

睫毛が揺れて、彼女の瞼が開いた。それからゴシゴシと目を擦っ

て身体を起こした。小動物のような愛くるしい瞳が僕を見つめる。

「大丈夫？」

昔と逆転した形だ。僕が彼女に尋ねた。

「だいじょーぶ」

彼女は僕の腕の中で声を発して笑った。流石に小学校の時より僕の腕は太くなっている。「彼女を守るため」なんて言うとは恥ずかしいけど、あの事件がよほど悔しかったのだろう。いつからか僕は、様々なスポーツに手を出し始めた。おかげで今ではその辺の男よりは強くなった。正式な軍人やガードマンには敵わないが。

「本当に撃ったのかな？」

他人には普段と同じように聞こえる声で、彼女はそう尋ねてきた。いつもより少し高い声。色んな事を経験してきた彼女でもやっぱりこの状況は怖いはずだ。

「ここに入る直前までテレビ全局生放送で呼び掛けてたよ。『発射された模様です。至急避難して下さい』って。それに、携帯の電波が立ってなかったし」

事実を言った。

「困ったね、どうしよつか？」

「そう言われても……まあ、とりあえず飯でも食おうよ」

解決法が分からないときは時間をおいて考えるべきだ。僕の持論。シエルターの奥には酸化し辛い金属を使って作られた小さなコンテナが置いてある。その中には少量ながら食料が入っているらしいのだ。

「あ、それね、パスワード入れないと開けられないよ？」

後ろから彼女の声がした。知っているなら最初に言ってくれ。開け口がないかとコンテナの周りをウロウロしていたのが恥ずかしいじゃないか。

「パスワード知らないから、入力お願いします。姫様」

「姫って呼ぶな……！」

ぷうっと頬を膨らませて拗ね、シエルターの入り口にあったらし

いキーボードに向かって、叩き付けるようにパスワードを入力した。壊れそうで怖かった。

「それ壊れたらパスワード認識されなくて僕ら飯食えないよ」

「こんなんじや壊れないし、ってゆーか壊そうとしてません！」

「姫様。そう怒らないでくだ——」

RPGなら効果音が流れただろう。ドカツ！と。要するに後ろから蹴られた。前につんのめりそうになる。

「姫姫言うな！」

「……天使様？」

二人きりのとき、こんな風に彼女をからかって楽しむ。緊張感の欠片もないのは承知だ。だって、どうせ近いうちに僕らは死ぬ。全世界に放たれた核ミサイルから生き延びられる人など、ごく僅かだろう。最後が来るのが分かっているなら、そのときまで楽しむべきなんだ。

「あたしは天使なんかじゃないでしょ？」

今世の中で起こっている全てのマイナスの感情を集めたような悲しい顔をして、彼女は僕に問う。そんな事を言う理由も、そんな顔をする理由も分かっている。まだ、傷は癒えていないのだろう。傷つてのは、彼女が間接的に殺してしまった女の子のことだ。その子は彼女の目の前で自殺して、心に傷を付けた。

僕が表すなら、彼女——ワカナの声に嫉妬して自殺した。それだけなのだけど。彼女にとっては、意味が全く違う。自分の歌は人の心を癒すはずなのに、逆にその子の心を傷つけて、追い詰めて、殺してしまった。

『人を一人殺した。その罪は一生消えないし、償いきれない。でも、だけど、歌うことしかわたしには出来ないんだ。だから歌い続ける』

彼女はあのととき、涙を流しながら僕にそう宣言した。それから彼女はその通りにしている。

「ねえ、聞いている……？」

そうだ、僕は彼女と話していたんだ。どうやら思考中は相手の話が聞こえないらしい。

「ごめんごめん」

そう言っただけ僕は彼女の髪の上に指を通す。サラサラとした髪を指に絡めて、すーっと撫でる。

「なによ？」

「特になにも」

僕は僕の想いを伝えただけ。側に居続けて、君にだけ伝え続ける。

「……ご飯要らない」

泣きそうな顔で見上げてくる彼女に、何も言えない。ピタッと僕に張り付くように体を擦り寄せてくる。

「苦しい？」

無言で頷く彼女。僕は寝転がって手招きした。

「おいでおいで」

優しい声色で呼び掛ける。

「猫じゃないから」

そう言いながらも近づいてくる彼女を抱き締める。コンテナから取り出した大きな毛布を手繰り寄せ、二人のちょうど真ん中に掛けた。

「ねえ」

「なに？」

少しだけとぼけてみる。でも、熱のこもった目で見つめられると、僕は我慢できない。いつも思うけど、緩やかに上昇していく体温がなんだか自分じゃないみたいで、ちょっと気持ち悪くて、切なくて、だからもう一回ギュッと抱き締める。もし全てが嘘でも、腕の中の温もりだけは本物だよ。

「だから、安心して」

返事が返ってこない。寝てしまったか。三十分ほどそのままの体勢でいたのだろうか。次第に彼女の腕から力が抜けていった。その腕

をそつとほどこいて、彼女を起こさないように静かに毛布から脱出する。

「さて……」

音を立てないようにポーチから分厚い手帳とシャーペンを出し、僕はまた書き始めた。

中学生のときの話しを書こうと思う。

とは言ってもこの話の前半に僕は登場しない。彼女や付き人、専属の教師から聞いたことしか書けないのでどうしても簡潔になつてしまつが、勘弁して欲しい。

その頃、徐々に歌による癒しの力を発揮し始めていた彼女。訪問するのはもっぱら国内の刑務所だつたらしいが……。それはともかく、彼女は国から保護される身分となつていた。それこそ軟禁に近い。必要なときに連れ出し、機械的に歌わせるといった、モノ状態推測するに、彼女の精神状態が最も悪かつた頃のお話。元々親が居なかつた分、手続きは楽だつたようだ。保護者と言うのか監督者というのか分からないが、そういう立場にある伯母家族に（それこそ三代は遊んで暮らせるような）莫大な金を国は払つた。その代わりに、国が彼女を保護し、教育することになった。彼女の歌の力は、彼女を手に入れるために払つた金額以上に価値があると言ふことなのだろう。国内外問わず彼女を連れてゆき、多大な金を貰つた。

要は、彼女自身の価値ではなく、歌によって稼げることを見越して、国は彼女を手に入れただけなのだ。人を癒せるもののとか、助けられるものじゃない。

繰り返し説明しているのは僕に文章能力がないからではない。それはとても大切なことだから。

彼女は人間であるのに自由がない。歌うだけの人形。彼女の気持

ちなんて関係ない。

金や国、自身の存在する意味。様々なことが絡んで、彼女を苦しめる。

各国要人の相手もさせられる。セクハラなんて当たり前。理由は分からないが、お偉いさんと夜を共に過ごしたこともあった（何があったかなんて言うまでもない）。

何を持って普通とするか、定義なんて分からないけれど、確かに普通の中学生ではなかった。

学校に行けなくなった彼女には専属教師が勉強を教えに来ていた。その教師がいつものように部屋に入ってみると、彼女は光るモノを持ってベッドに腰掛けていたらしい。

「何をしているの……？」

教師が言葉をかけると、彼女はブルツと震え、手からその光るモノを落とした。教師は不審に思っ、恐る恐る近づいていった。右の手首を左手で押さえながら俯いている彼女。

「ねえ、ワカ——？」

声を掛けたそのとき、教師の視界に映ったのは、足下のナイフだった。

「ちよつと！ 何してるの！？」

教師がそう言うと、彼女は嗚咽を上げながら泣き出した。すぐさま、部屋の中にあつた電話を使い、教師はお目付き役に連絡した。

何故こんなことを——教師は混乱しながらも、彼女のお目付き役に対して、簡潔に事態を説明した。今、彼女がしていたのは。

「海原さんっ！ 彼女がつ、リストカットをしましたっ！ すぐに来て下さい！」

電話の向こう側に居るお目付き役に怒鳴り、音を立てて受話器を置いた。そして教師は彼女の元に駆け寄った。

「なんでこんなことするのっ！」

「……なんでって、ひっく、あたしだって、こんなことしたくない。

……ひつく、辛いよ」

教師は彼女がリストカットをした理由も、今彼女が喋ったことも理解出来なかった。

「こんな生活しておいて……よく言えるわね！ 金も食事も住む場所だつて男だつて困らないでしょ！？」

彼女は小さく震えだし、その教師を真つ赤な目で睨み付けながら叫んだ。

「あなたには……分からない！ あたしがっ！ どれだけ大変かつっ！ 誰も分かつてくれないつつっ！」

彼女は立ち上がると、端正な顔立ちを歪めて、それこそ鬼のような形相で教師に突進したらしい。彼女は手を前に突き出すと、教師の身体を突き飛ばした。

「きゃあああああつ！」

教師の悲鳴が部屋中に響いた。そこで部屋の扉が開いた。外から何人かの人が入ってきた。お目付役——海原さんや、医者たちが入ってきたのだ。

「ワカナ！」

海原さんが一喝すると、彼女はへたへたとその場に座り込んだ。

海原さんは側に寄つて、そのしわくちやの腕で彼女を抱き締めた。

かいばつこ
海原俊蔵。

お目付役というより、お祖父ちゃんのような立場だったそうだ。

彼女は初めて大声で泣いたらしい。

……その後、彼女は海原の前で想いを吐露した。嚴重な警備の下で過ごす彼女。連れ出されると歌わされる。国外に行くとお偉方の相手もする。その全てが彼女のストレスとなつて溜まっていった。そしていつからか習慣的に手首を切るようになっていた。

『歌う以外に、生きる理由が欲しい』

要はそういうことだ。1時間掛けて、静かに泣きながらそう言つた彼女に、海原は呟いた。

「気付いてあげなくて、ごめんなあ」

頭を撫でながら、海原は色々考えたそうだ。

どうすれば、何をすればこの子のためになるのだろう――

「歌うのは好きかい……？」

「好きだよ。でも、でもさ。ちゃんとあたしを見てくれてないよ。歌うあたし以外を見て欲しいんだよ」

何が、誰が必要なのだろう。自分のような立場の人間ではなく、対等で、彼女の生きる理由になるモノ。物。者。

……僕だった。

海原さんがどうやって僕を見つけたのかは知らない……けど、後日訪ねたところ、彼女は僕が見事にぼこぼこにされた時の話しをしたそう。なんだ？

話を戻して、とりあえず言わせて貰うと、僕は中学校からの帰宅中に突然拉致された。黒塗りのベンツから屈強でむさ苦しい男達がそろそろと出てきて、僕を取り押さえたのだ。

強くなるうとして、水泳（そもそもコレが間違えであるが）を習っていたのだが、水泳で培ったのは肺活量だけだった。大声で喚いて暴れる僕。そんな僕にお構いなしで、彼らは僕を車に押し込んだ。車の後ろには、一人の老人が座っていた。それが海原さんだった。

「手荒い歓迎だったと思うが、すまない」

「あんた誰」

「海原だ」

海原、と名乗った老人。

所々白髪が交じっている。60才くらいだろうか。なんて思っている。

「――ところで、君はワカナを知っているね？」

唐突過ぎる質問に声が裏返ってしまった。

「えっ？」

何故ここで彼女の名前が出されるのだろう。って言うか、なんで彼女を知っていることを知っているんだ。

「誰それ。全然知らねえ」

ワザととぼける。言葉も砕けた感じに。完全にチャラ男風。
「ワキタ」

だから誰だつて。って思った僕の首元にナイフが見えた。心拍数が急激に上昇。

世の中には知らない方が良いことがあるそうだが、自分の喉元に突き付けられたナイフも例外ではないだろう。見えない方が良かった！

「え、いや、待って！ ちょっと……！？」

「もう一回言うね？」

害のない老人の声だが、完全に脅迫している。

「ワカナを知っているね？」

「犯罪ですよ！ こんな自白の仕方ってありですか！？」

チャラ男キャラを装っていた僕の演技は完全に崩壊した。

「関係ねえなあ……」

ピシヤリと海原さんは言い切った。僕はその声に黙ってしまう。

『怒鳴る』というのは、激しい動の力で相手を黙らせるモノだと思ふ。だが、海原さんのは違う。静かにはつきりと言い、それで相手を黙らせるという、柔らかな静の力がある。柔らかいが、その内に秘めているのは激しい動の力よりもっと強い力だ。

「し、知ってま——」「聞こえない」

いつかと同じで言葉が震えていて、尚かつ今回は最初に舌を噛んだ。情けないことこの上ない。自分を叱咤して、もう一度言う。

「知ってますっ！」

「結構だ、少年」

そう言うつと、海原さんは快活に笑い出した。そして、「よく見てみなさい」と僕の喉元に突き付けられたナイフを指差し、更に笑った。

「なんで笑ってるんですか」

僕の命の今後を握っている、そのナイフを握っているワキタとか

言う男も笑っている。

そこで何故か僕は閃いた。このナイフは偽物だったのだ。

「オモチャですか!？」

「オモチャだし、切れない。だが、刺せば――」

そう言つて、ワキタは自分の腰掛けている背もたれにナイフを突き刺した。見事にブスツと刺さっている。これベンツ……だよな。

「ひい」

「もし少年が二度目の質問で、『知らない』と言つたら、手の甲を指すつもりだったよ」

「なんてことを……」

思わず僕は嘆いていた。本日二つ目の知らなくて良いことに追加だ。そんなやり取りをしている間に、僕を乗せた車は彼女の住む家へと着いていた。車から出た僕はその家の大きさに驚いた。僕が家族と住んでいるアパートの優に十倍はある。後ろを振り返ると、長い道路があつた。その道路の先には、大きな門がある。そして敷地を囲むように二十メートルくらいのフェンスが張り巡らされていた。

「スゴいなあ」

感嘆した僕は、何故か分からないけど、張り巡らされているフェンスをよじ登りたくなつた。走つてフェンスの前に来ると、蜂が飛んでいるような音が耳に飛び込んできた。

ブーン……バチバチ。

首を左右に振つてみるが蜂らしきモノは居ない。何も考えずにフェンスに手を掛けようとした次の瞬間、僕はぐうつと後ろから引つ張られた。

「馬鹿者! コレに触つたら死ぬぞ」

「な、なんでっ」

「ただの柵な訳が無いだろう」

「もしかして、バチバチ言ってるのは……電気ですか?」

「電気。間違えではない。が、流れているのは高圧電流だ」

海原さんは「見てなさい」と言つて、地面から小石を拾つて、高

圧電流が流れているフェンスに向かって投げた。小石はフェンスに当たるとバチバチと音を立て、黒こげになって下に落ちた。

「……焦げてますね」

「焦げてるぞ」

「なんでそんなモノを……」

そう言った僕を海原さんは不思議そうな目で見た。

「少年は、雑誌を見ないのか？ ゴシップ誌とか」

「いや、彼女のことがあったから」

「ああ、そうか」

海原さんは納得したように頷いて、語り始めた。

「ワカナは、有名になりすぎたんだ」

「そうでしょうね」

僕は相づちを打つ。海原さんが言っている通り、彼女は有名人だ。日本国民が知っているのは当たり前だし、国外の人間も結構な数の人々が彼女を知っているではないだろうか。

「有名になると、どうなるか分かるかな？」

僕は言葉に詰まってしまった。どうなるんだろうか。

「昔のどっかの大統領とかみたいに、暗殺されるとか」

自分で言って苦笑してしまった。まさかそれはないだろう。思っていたのだが、海原さんは当然という顔で頷いた。

「ええ！？」

驚愕した。彼女はそんなに危ない生活を送っているのか。

「彼女の場合は有名どころではないんだよ。本当に、凄い力を持っている。そんな力に憧れて拉致しようとする輩も居るし、その力を憎いんで殺そうしようとする輩も居る」

「そんなに大変なんですか。彼女は」

「彼女も大変だが、私たちも大変だ」

海原さんは左腕のシャツを捲った。すると、そこには大きく縦に挟れたような古傷があった。

「それは……？」

「彼女を殺そうとする奴と戦ってな」

もう絶句するしかなかった。こんな土地で戦闘があったとは。つてこの老人は一体何者だよ。

「まあ、そんなことは良いんだ」

「はあ」

僕は頷くしかできない。

「ワカナの友達……いや、もっと近づいて欲しい。互いの存在を尊重しあえるような、そんな関係に」

空を見ながら僕に語る。海原さんは何を思っているんだろう。

ふうっと息を吐き出して、僕に言った。

「後は君たち自身の問題だなあ」

「よく分かりませんが」

「今はそれで良いのだ」

そうですね。とだけ言つて、僕は屋敷へと歩き出す。

そして僕は彼女と再会する。少し髪が伸びていて、胸が膨らんでいた。側に寄ると彼女の匂いがした。僕は喋り掛けた。「久しぶり」

と。その後の彼女の反応はというと、泣き出した。数滴ではなく、赤ちゃんが泣くみたいに。他人のそんなところを見たことがない僕は慌てふためいてしまった。だって、「どうしたの？」って声を掛けても、ボロボロ涙を溢すばかりで、ずっと泣いているし。そんなときに限って海原さんは居ないし。

「ワカナ」

僕は彼女の名前を呼んで。

「大丈夫、大丈夫だから——」

と、バカの一つ覚えみたいに唱えていた。

涙が止り始めた頃、僕は彼女の手を引いて自室に連れて行つた。掴んだその手は酷く冷たく、まるで精巧に作られた機械人間みだった。無機質って言うのかな。

彼女の部屋はとても簡素だった。真っ白な部屋に、本棚と学習机、それとベッド。ベッドの端っこにぬいぐるみが何個か置いてあるだ

けだった。

ドコに座ろうかと考えている僕を置いて彼女はベッドに座った。僕もベッドに――彼女から少し離れたところに腰掛ける。泣き止んだばかりでまだ赤く腫れている目からまた涙を流す。僕は声を掛けられずに沈黙する。何を喋ればいいか分からないし、分かっていたとしても上手に色々話せるほど僕は器用じゃないのだ。

聞こえてくるのは僕の鼓動の音と彼女が鼻を嚙る音だけ。でも沈黙は破られる。

「……あ、あのさ」

「なーに？」

不自然な優しさにならないように気をつけながら声を出す。

「コレ、見て」

右の手首を僕に見せた。包帯が巻かれていた。

「怪我でもしたの……？」

彼女は首を振って、包帯を解き始めた。するすると解けていく包帯。全てが解けて見えたモノは、治りかけだったり傷ついたばかりだったり出来た時期は違うモノの、全て切り傷だった。コレは……リストカット？

「コレは？」

そのとき彼女が何を思って僕にその傷だらけの手首を見せたのか理解出来なかった。

「ここ、自分で切ったの」

彼女は手首に視線を向けた。

「自分で？」

「自分で」

彼女は淡々と答える。

「どうして？」

「分からない」

また彼女は淡々と答える。

「痛い？」

「痛いけど、痛くないよ」

そう言って彼女は静かに笑った。何故か心が締め付けられた僕は彼女の頭を撫でる。

「ホント？」

痛いけど、痛くない。それは傷じゃなくて心が痛いのかな。

「うん」

彼女は頷いてから、また話し始めた。無機質だった身体に熱が灯るように。饒舌に。

「あたしは、歌が好きで、歌ってきたんだよ。ずっと」

遠い目をしている。彼女は眩しそうに目を細めた。僕だってTVで見た。

「知ってるよ。歌っているとき、綺麗だし、本当に幸せそうだな」

「幸せだったんだけど、いつからだろう。なんか疲れてきたんだ」

「歌うことに？」

「違うよ。歌うのは大好きで、変わらなかったんだけど、なんか、あたしの存在より、歌の方が大きくなっちゃって」

歌うことによって起こる心の癒し——悪い言葉に変えれば『歌の支配力』が彼女の全てだろう。ただ、それは国レベルの話だ。もっと下の、僕のような人間が思うことは違う。

「偉い人はそう思うかも。でも、違うよ」

「何が？」

「ちゃんと、君自身に興味を持っている人は居るよ。何食べてるんだろうとか、どんなこととして毎日過ごすのかとか、さ」

「そうかも。でも、そうじゃなくてさ」

分からない。どうということなんだろう。

「歌うだけじゃなくて、色んな国に行ってさ、偉い人とエッチするんだよ？ 『幼い方が可愛い』って。笑っちゃうよね」

彼女は本当に笑った。小鳥がさえずるような小さい声で笑った。そこには哀しみがあつた。

「存在はどこにあるんだろう。声？ 身体？ どこに理由があったら、あたしは——」

僕はそんな深い考えはしないよ。でも思ってることなら言える。「君の全部じゃないかな？ 声でも身体でもなくて……歌っているとき以外の声だつて僕は好きだし、もちろん、歌っているときだつて好きだし、女の子としても可愛いと思うよ」

恥ずかしい。耳まで真っ赤になっているだろう。でも本当のことだし。言うべきことだろう。隣にいる彼女を窺うと、手の甲で目を擦っていた。

「ごめん。なんかこういうこと言ったこと無いから……変だった？」
恥ずかしさもあつて、そんな言い訳をすると、彼女は腫れた目をこちらに向けこう言った。

「ううん。全然……変じゃないよ。ありがとう」

感謝されるのは単純に嬉しい。それにちよつとくすぐつたい。

僕は安堵して、思わず「良かった」と口にしていた。

「ねえ……あのときのことなんだけど、覚えてるかな？」

しっかりと僕を見つめてそう言った。あのときのこと。目を閉じて考える。

いつのこと……？

「あのときも、こうやって凄く近くに居たよね」

ああ思い出した。ボコボコにされた弱かったいつかの僕のことだ。「めっちゃくちゃ恥ずかしいんだけど」

そう言つて閉じていた目を開けると、眼前に広がるのは彼女の顔だった。整った可愛らしい顔が僕を目掛けて迫ってきた。

「え、——」

驚いて彼女の名前を呼んだ。でもその声は、僕の唇は、彼女の艶やかな唇で塞がれていた。

柔らかな感触に身を委ね、彼女を知る。僕のモノではない彼女の甘い匂いが、僕の口内で混ざり合う。少しだけ彼女の唾液が流れ込んできて、僕も送り返したりする。今感じているこの優しい気持ち。

同じなら嬉しい。だけど――

彼女は目を瞑っていて、睫毛を震わせている。

どんな想いなのか。怖いから、分からないから、僕は自ら身体を引いた。

「ワカナ……」

「誰か、側に、居てよ……」

えぐえぐと泣き出した彼女を抱き締め、頭を撫でることしか僕には出来なかった。

そんな風に再会したわけだけど、その後僕は彼女と同じように学校に行かなくなり、親元からも離れて彼女の屋敷に住むことになった。残念だったのは僕にも専属の家庭教師が付いたことだ。勉強の呪縛からはまだまだ解放されないらしい。

それからずっと。ずっとだ。彼女と一緒に過ごした。情緒不安定で、10分前まで笑っていたのに、急に怒って僕に喚き散らして泣き出すというようなことが何度もあった。自傷行為だって彼女は幾度もした。だけどその度に僕は、彼女の頭を撫でて、ついばむようなキスをして、「ずっと側に僕は居るよ」って言うて……そうやって、幾つもの夜を越えた。

そして僕は、通常で言えば高校三年生と呼ばれる年となった――

気が付くと大きな欠伸が出ていた。脳から分泌された成分が僕に眠れ眠れと命令する。その命令に従うべく、僕はペンと手帳をポーチにしまい込むと、そのままボタンと床に倒れた。

僕は毛布の中に居る。だってこんなにも暖かいのだ。恐らく彼女が掛けてくれたのだろう。でもまだ寒くて、側にあった更に柔らかで良い匂いのするモノを抱きしめた。なんだか抱き枕みたい。少し

ずつ僕の意識は覚醒していき、目を開く。すると目の前には彼女の胸があつて、視線を少し上に向けると、顔を真っ赤にした彼女がいた。口をもごもごさせながら「お、おはよ」と僕に挨拶をした。

「……おはよう」

そう返す僕の頭にはふわふわとした彼女の手が乗つけられており、まるで子供をあやすようにぽんぽんと優しく叩いてくる。

「起きて、ご飯食べようか？」

何故か彼女は照れながらそう言い、僕はもう少しくうしていたいと思いつつも頷いて起きるのだった。

起きる。食べる。寝る。

彼女が寝てから僕はまたペンと手帳を出して書き出す。

さあ、続きだ――

毎度ながら、状況を少し説明しておく。

彼女は世界中の人々から愛されていた。その声を耳にすると癒され、邪な感情や、怒り、憎しみ、そう言った感情は全て彼女の歌声によって浄化された。当たり前だが、各方面から賞賛され、様々なあだ名というのか、様々な謳い文句をつけられて紹介された。

平和の象徴、天使の降臨、など。だけどそれは、その煽りは良いことばかりじゃない。歌手っていうのは彼女以外にも居る。その人達がみんな彼女のことを好ましく思っているわけではないのだ。

今から書こうとしているのは、彼女の傷――間接的にはあるけれど彼女が殺してしまった人の話だ。

あの子は『スウィートギャラクシー』というバンドの中で、ボーカルを務めていた。更に作詞作曲編曲を全て一人で行い、出る曲出る曲ミリオンヒットは当たり前レベルの才能を持っていた。

どちらも美しい容姿をしていて、歌手だった。しかし、あまりに

対照的。

初めうちだけだが、彼女はあまりあの子に関心を示していなかった。自分は自分で他人は他人。そんな考えの持ち主だったから、あの子のことを気にしていなかったのだろう。

だけどあの子は違った。いつも他人と自分を並べており、どちらが上か、どちらが素晴らしいか、そこに重点を置いて、生きてきた歌ってきたのだ。

確かにあの子の歌は人を惹きつける。が、人間として僕は嫌いだ。いつのことだったか、あの子がテレビに出ていて、CDの週間売り上げランキングについてコメントしたのだ。

「どうしてアタシの曲が一位じゃないの？」

朝のブレイクタイムでコーヒーを飲んでいた僕の動きが止った。

キヤスター、コメンテーター、各々が微妙な表情をしている。僕と同じ顔をしているだろう。週間売り上げランキングが貼っている紙の一位の曲を指して。

「あの曲、曲調もよくあるパターンだし、そもそも楽器それぞれのリズムだって簡単。歌詞になんか捻りがあるかと思えば、全くなし。それもよく使われるフレーズ並べて、よくまあ、ご大層に、『考えに考えを重ねて創り出した、自信作です』だ。アタシの歌聴いてみるってっ！」

早口で捲し立てる小さな口を止めるためにその場を仕切る司会者の宮木^{みやぎ}が咳払いをした。本当にこれ以上喋らせたら、機関銃の如く様々な人の心を撃ち抜くだろう。創った本人とかファンとか。

「ま、まあ落ち着いて下さい。私はどちらも良い曲だと思いますよ。感性なんて人それぞれですし——」

「あああああっっ！ うっさいわね！ こんな曲に負けてるアタシの曲なんて意味ないじゃない！ 分かった！ 即刻アタシのこの曲、流通させるの止める！」

訳が分からない。宮木も同じ気持ちだと思うが、「ランキングの集計を開始する日付の関係上……」うんちゃらかんちゃら云々と色

々言っていた。

「アタシの曲じゃなくて、このランキングが悪いのね。なるほど」
ランキングが悪いってどんな考えだよ。

「いや、ランキングが悪いというか、ええ、まあ、そうですね。色々ありますよね」

宮木は言葉を濁しつつ、次の話題にやっと思った。

それを見てから僕はあの子を嫌いになったというわけだ。

あの子は自分の才に酔っている。自分以外を認めない、認めたくない。そんな人間はいくらでも居る。だから僕はそういう奴を『才能のある奴』としか思わない。僕が本当に凄いのと思うのは、彼女のような、他人のために何か出来る奴だ。

本当に対照的な二人であつたが、それ故にマスコミは放っておかなかつた。ほぼ全てのテレビ局で、特集が何度も組まれた。背丈体重血液型誕生日ヒット曲の数CDの最大売り上げ枚数……などを比べて、どちらが良い、どちらが凄いを言い合い、最終的には「どちらもホント良いですね」などと曖昧なことを言つて最終的な判断をしない。そうやって少しずつ確実に、あの子と彼女を対決させる展開へと巻き込んでいった。

あの子は彼女に興味津々で、彼女を出演させるためにいつも挑発をしていた。

「やっぱりアタシの曲の方が良いから来れないのよ」

「自信がないと、やっぱり曲も腐るし、来ないなら来ないで良いのよ。その代わり、ちゃんと言つてよね。『負けました』って」

「テレビ局だつて暇じゃないんだから、ホント困るよね」

『基本的』にはだけど、争うのは好きじゃない彼女。でも再三にも渡る挑発は、彼女に心に火を着けたようで、彼女は日に日に鼻息を荒くしていった。側に居る僕や海原さんは気性が荒くなった彼女を諷めた。だが、太陽が僕らの肌を焼き焦がすような季節になった頃、遂に。

「出てやるっ！」

もう我慢できない。といった様子で彼女は叫んだのだった。

『注目の二人！！ カリスマ歌姫！vs虹色の声！』

「さあ……いよいよですね！」

カメラには三人の男が映っている。真ん中に居て、大きな口で声を張っているのは宮木だ。僕は知らなかったが、若手の中では実力があるフリーアナウンサーらしい。

左にいる上森うえもりという男がケラケラと笑いながら喋った。

「今話題の二人ですからねえ」。かなりの予算が出たんじゃないですか？」

右側にいる堅そうな男、下海したうみが真面目に答える。

「どちらもお金はいらないと言ったそうですよ？」

「まあ、それはそれですねっ！ それでは、本人達の登場です。どうぞっ！」

待機室を出てそのまま真っ直ぐに通路を進むとそこはもうカメラの前である。彼女は立ち上がり、僕に言った。

「それじゃあ、行ってくるね」

「うん。頑張れ」

彼女はニコツと笑って、待機室と舞台を繋ぐ扉を開けた。颯爽と歩いてゆく。こんな場面を数十回も見ているけれど、やっぱりカッコイイ。そう、僕はもう数十回も見ているのだ。義務教育が終わってから、僕は彼女と共にライブ先へと同行している。もともと、ライヴなのか慰問なのか訪問なのかよく分からない。それはともかく、歌う度に彼女はさっきのようにステージへと向かって進んでいくのだけど、そこへ歩いてゆく様がどんどん一流になっている感じた。しつかりと己の足で進んでいる。

少しずつだけど、変わってゆく。何故なんだろうか。

性接待が無くなった訳じゃない。誰かに呼ばれて、その男と一晚を共にすることもある。僕には分からないこともたくさんあって、彼女が自分を傷つけてしまうときもあるだろう。だけど人間って、

向かい風を受けて倒れて折れそうになってもちゃんと自分の足で立てるんだ。だから、僕が声を掛けるのは本当に辛そうなときだけにしている。歯痒いけれど、僕にはそれしかできない。ただ見ているだけ。でも、一瞬一瞬の彼女の姿を目に焼き付けるように。そうしていることが、彼女に伝わるように。

「それではっ！ 今回は念願叶ってお二人に歌って貰います！ 審査員は会場の皆様です！ 良かったと感じられたら、お手元のボタンを押して下さい！」

宮木が張り切る。

「えー。私、上森は『カリスマ歌姫』のバンド、『スウィートギヤラクシー』のセコンド的なモノを務めます」

「そしてワタクシ下海は『虹色の声』を持つワカナさんの担当です。どうぞよろしく願います」

下海は英単語の暗記をしているのかのように、淀みなく観客に告げた。

「それではまずは先攻で、『虹色の声』のワカナさん。準備をお願いします」

そう言われた途端に彼女はカメラから消えた。どうしたのだろう、と僕が首を傾げていると、そそくさと控え室に戻ってきて、何故か僕を見つめていた。

「意外と緊張してたり？」

「してないよっ！？」

「声高っ」

「別に緊張なんてしてないってっ！」

緊張していないなら、別に戻ってこなくても良いじゃないか。僕はそう思っただけで苦笑する。大丈夫。そう、別に君はいつも通りで良い。いつも通りが良いんだ。

「大丈夫」

僕はそう言っただけで彼女のさっと手を掴み、指を絡める。少しだけピンク色になったであろう彼女の頬に口づけをする。彼女が小さく悲

鳴のような照れ隠しのような声を出した瞬間、下海の声が聞こえた。
「それでは、『虹色の声』で歌われる、ワカナさんです！ どうぞ
！」

「行つてらっしゃい」

彼女は軽く頷いてステージに上がった。

「ではワカナさん。曲名は『嬉律音』です」

天井の照明が落とされ、ステージの中央の彼女だけにライトスポットは当たっていた。

貴方にだけ聴こえる 鳴り始めた短音は 「止まらないで」 祈
つてみた

奇跡のような軌跡に私は何を想うの？ 「止まらないで」 頷い
て見せた

感情で言うなら喜怒哀楽の『嬉』と『楽』は彼女の歌詞にない。
それでも聴いた後にすつきりするのほ微かな希望が見えるから。

揺らいでる意思が消えそうになる手前

光に似せた闇が貴方と私を繋
いだ

孤独の音を鳴らして現在の私を歌うの

本当だと信じている気持ち 『歌う

のが好き』

僕は知っている。

深い悲しみと同時に幾つもの大切なモノを抱いて生きている彼女
のことを。

だからこんな歌詞が書ける。こんな声で歌える。

偽物たちが蠢いて失われる幾つもの輝き 存在を確かめる故どう

しても遠退いてゆく
握っていたたった一つの音さえ否定して 貴方はそこで一体何を
願いますか？

彼女が生きてる理由はコレがあるから。この歌声で人々を幸せに
出来るから。

本当の優しさと孤独を知っている彼女。僕は彼女の歌を聴く度に
想うんだ。

一人じゃないよって。

私にだけ聴こえる 死んでいく叫び 「止ってみて」 祈っていた
偶然のような必然に貴方は何を想うの？ 「止ってみて」 頷い
ていてよ

でもそれは彼女に届いているのだろうか。分からない。
分からないから僕は感じるだけ。多分それだけで良いんだ。
彼女の凜とした声に耳を澄ませ、身体を預け、心を許すだけ。

誰も知らないのは飛んでいく刹那だから みんな知ってるけど認
識が曖昧だから
誰も知らないのは貴方が私じゃないから みんな知ってるけども
うどうでもいいから

お互いがお互いを分かり合えるなんて有り得ない。
だけど、それでも分かり合いたい。

『誰も知らない』なんてこと、絶対無い。僕は居る。僕が居る。

偽物たちが蠢いて失われる幾つもの輝き 存在を確かめる故どう
しても遠退いてゆく

掴んで離さない自分だけの音を否定して 貴方はそこで一体何を

願いますか？

君は一体、その場所で一体何を願っているの？
孤独の音はまだ鳴り止まないの？
存在を認められないの？

貴方はそこで一体何を鳴らすの？

本当の君はどんな音を鳴らしたいの……？

最後のフレーズを聴いて僕はそう思った。本当の彼女は何を想い、何を考え、何を歌いたいんだろう。頬に冷たい感触を感じて気付いたが、僕は泣いていた。

頬を伝うのは僕の涙だけど、僕のモノじゃない。彼女が流させた涙だ。

「……寂しくて……悲しくて……切ない曲でした……」

宮木は泣きじゃくりながらそう言った。

会場は静かじゃなかった。ほとんどの人が泣いていた。その泣き声がBGMとなってまた彼女の歌を盛り上げる。心の琴線にそっと近づいて触れる。そしてささやくように問いかける。『あなたはなんで生きてるの？』と。

「……俺、なんで、生きてるんだろう」

「上森、早く人数を」

号泣する上森に冷静に指摘する下海。でも下海のその目も、今にも泣き出しそうなほどに真っ赤だ。

「それでは——ん？」

上森が人数を告げる前に、既に大きなスクリーンには人数が表示されていた。

「全員、千人です……！」

その瞬間、あの子の目は大きく見開かれ、わなわなと震えだして

いた。

「ワカナさん……良かったです。今回TVには初出演でしたがどうでした？」

宮木がそう告げ、彼女にマイクを向けた。

「ホントは、本当はかなり緊張してました。でも歌い始めると自然になれるんですよ。その私の歌が、気持ち、想いが、みんなに届いたなら嬉しいです。感動じゃなくても、共感とか文句とか意見とか、なんんでも良いんです。何かを感じて貰えれば、歌手として嬉しいです」

彼女らしい感想だ。

「さて、次は『スウィートギャラクシー』の」

歌う準備をして貰おうと、まだ泣いている上森に代わり、下海が喋っているあの子に近づいたときだった。

「ふざけんなっ！」

唐突にあの子はそう叫んで走っていった。司会者は慌てて「待つて」と叫ぶが、あの子はそのまま走ってゆく。何故だろう。そのまま放っておけば警備員なり彼女のマネージャーなりが引き留めに行くだろうに、僕は彼女を追いかけてしまった。仮にも僕は男だし、すぐに追いつけると思っていた。でも、あの子には追いつかなかった。引き離されてはないが、かといって縮まっているわけでもない。どんどん階段を上ってゆく。最上階の更の上、ヘリポートしかない場所で、一体何をしようというのだろう。

あの子が開けた扉を駆け抜ける。外に出ると真っ暗だった。闇に覆われた空で、明かりは月と星だけ。それだけが僕らを照らしていた。

僕の目があの子の姿を捉えた。

「どうするつもり？」

あの子に詰め寄りながら話す。

「こっちに来んな！」

『興奮している相手には冷静に』……だけど。冷静しても危険そ

うな相手にはどうすればいいんだろうか。

「なあ！」

僕は叫ぶ。

「来んなつってんだろっ！」

「僕は、君の歌を聴きたい」

苦しげに顔を歪め、こちらを見る。

「アタシの、アタシの歌は——……………で……………んな……………」

能面を貼り付けたような顔で何かを呟いた。

「聞こえないから近づくよ」

僕は聞き取るためにまた足を進める。あの子が立っている場所まで十メートルほどになったとき、突然あの子は喋り始めた。

「昔から、昔からアタシは歌うのが好きだった」

相づちを打つ。

「そうなんだ。ワカナと一緒にだね」

あの子は少しずつ下がっていく。カツンと音がした。ちょっとした段差にぶつかったのだ。その後ろにあるのは何もない空間。

「なんでだか分かる？」

「寂しかったからでしょ！？」

僕の背後から大声を上げる彼女。驚いて振り返ると彼女の目は不安そうに揺れていた。

「なんだって？」

僕の疑問に答えを返したのは、あの子だった。

「孤独感が無くならない歌い続けるんだよ。いつか心が満たされると願って」

僕の隣に立った彼女は、思い詰めた表情で言った。

「貴女の曲、一曲歌うね」

海の中を漂って　いつもみたい　ただソコに居た

黒の星があった　ほんの少し

光を見た

上を見てもまだ 匂いそうで匂わない君が居て

輝きはいつだって 引き摺られたときには

もう消えている

目の前には巨大な渦があった

呑み込まれて見失うかな もしそうなら 全て忘れてし

まいたい

澄んだ

青の重さだけ忘れずに

差し込む景色がさ いつもみたい オーロラみたい

月や太陽が ずっと照らすよ

この闇を

そうやって今もまだ 見えそうで見えない君をさがして

そんな僕は君にだけ 悲しい想いや不安 孤

独を届けたい

苦しみながら見た 赤の中誰かが笑い 君も笑い 僕も笑う

ああいつかも見た 白の中誰かが笑い 君も笑う そうだ

僕は居なかった

目の前には巨大な渦があった

呑み込まれて見失うかな もしそうなら 全て忘れてし

まいたい

澄んだ

青の重さだけ忘れずに

もうこれから瞳も開けない

聞えすぎて聞えない水の音 動けない ずっと身を任せ
澄んだ
青の重さだけ忘れない

…… 僕は呼吸さえ止めていたかのように思う。この深い悲しみ
はなんなのだろう。

彼女が歌い終わって、目を閉じていた。あの子は静かに、声も立
てずに泣いていた。

「あたしが歌うより、良いじゃない。全部そうやって、あたしの想
いもみんなの想いも盗んじやえばいいじゃない。あたしには、コレ
しかないのに。あたしのモノ、消えちゃう」

「わたしと貴女が歌えば、伝わる想いはそれぞれ違うよ」

確かにそうだろう。でも、どちらかの歌声を選べと言われれば、
彼女だ。

「正論すぎて、悲しくなるね」

あの子は微笑むように言い、続けて「どんな想いが伝わる伝わら
ない、そういうことじゃない。あたしは一番が良かった。一番で居
たかっただけ。出来ないなら、せめてアナタに見せてあげる。あた
しのような人もいるんだよ。優しい優しい最低な天使さん（……
……）」

数瞬の後、あの子の身体はふわりと浮いた。

しまった—— そう思った僕が身体を動かすより早く彼女は動いて
いた。彼女があの子へと手を伸ばす。そして手と手が触れ合った瞬
間、あの子は彼女の手を払って自ら落ちていった。

「——っ」

彼女はヘナヘナと前に倒れ、地面に膝をついていた。彼女の横に
並んで、顔を覗き込んだ。潤んだ瞳からポタポタと涙が落ちて——
僕は早く言葉を掛けなきゃいけないのに、その瞳の奥に吸い込まれ
そうな錯覚に陥る。

「……………どうしてっ!」

抑えようとしていたのであろう激情が彼女の口から溢れてくる。

そのはち切れんばかりの想いを抱いて、あの子のように飛び降りないとも限らない。だから僕は彼女の肩に手を置いた。

「わたし、あたしはっつ！ 追い詰めるかもしれないって、分かってたっ！ でもっ！！」

堪えきれない想いと涙で顔がぐちゃぐちゃだ。僕は彼女を抱きしめることしかできない。彼女は全部分かっていたからだ。

追い詰めるかもしれない。でも、それでも、彼女はあの子が生きることを選択することに賭けていたのだ。

「だけど……あたし、殺しちゃった」

僕と再会する以前のように、また、抱え込むのかよっ……。側に居ることしかできない自分が、本当に歯痒くて、悔しい。

「歌は、みんなを救えるって信じてた」

信じてた。なんて過去形、やめてよ。みんなじゃなくても良いんだよ。

「違う——君の歌は、僕に届いているし、みんなにだって届いている。でも届かない人も居るかもしれない。ううん。居るね。でも、それでも君は歌わなきゃいけない。意味、分かるかな」

小学校の時と同じくらい、トンチンカンな答えだ。でも本音なんだ。

「分かったよ……ありがとう」

泣きながら、微笑んで、僕に宣言する。

「人を一人殺した。その罪は一生消えないし、償いきれない。でも、だけど、歌うことしかわたしには出来ないんだ。だから歌い続ける」
僕は、ずっと、ずうっと側に居るよ。君が歌うのをいつだって見ている。

差し出した小指の意味が分からず、彼女は不思議そうな顔をした。

「約束、しょ？」

彼女は頷いて、小指を差し出してくる。僕は指を絡め、誓いを、約束をする。

ずっと歌う。ずっと側に居る。どっちも有り得ないのだ。人間は死ぬんだから、ずっとなんて言葉も意味も無い。永遠なんて無いのだ。でも確かに、このとき、僕らの中に永遠はあった。

起きる。食べる。寝る。その行為を繰り返して、少しずつ少しずつ、書いてきた。だけど、ほとんど書き終わってしまった。

少ない食料だって既に底を尽いてるし、それより大事な水だってもう無い。携帯電話の電池もないから、今が何時で、いや、何月何日かも分からない。核ミサイルが乱発されて、幾日経ったのか、それとももう一ヶ月くらい経っているのか。感覚も何もかも、本当は麻痺している。

一つ僕の中で変わったことを言えば、彼女に書いているところを見られても、僕はそれを隠そうともせず、そのまま書いていたことだろうか。だから、「何書いているの？」って訊かれて、僕は正直に答えた。

「僕とワカナの記録だよ」って。

それも結構前の話だ。

それよりさ、僕もワカナももうグッタリしているんだ。

次に眠って、僕らは生きているのだろうか。そのまま寝てしまわないだろうか。なんて考えるけど睡魔には逆らえない。不気味な倦怠感に引っ張られて眠りに落ちる。

その不気味さから起こしてくれるのは君で、名前を呼んでくれて、起きて、相手の顔があつて、安心するんだ。僕だって君が寝てたら、何度も何度も名前を呼ぶ。

僕だって一人は怖いから。側に居たいんじゃない、居て欲しいんだ。

「もうそろそろ死ぬなあ」

僕はワカナの隣で寝そべりながらそう言った。独り言みたい。

「そうだね。お腹減ってるし水飲みたいし」

「それが分かるだけマシだよ」

先に僕の方がぼっくり逝ってしまっんじゃないだろうか。そうなら、君は独りで、寂しがらんじやないだろうか。……寂しがらんだろうなあ。最期にそんな想いをさせるのはイヤなんだけどなあ。そんな意味の為さないことを考えてい僕は、そのまま深い深い眠りに落ちていった――

そしてまた君の声が聞こえる。でも分かるのは、君の声で起こされるのは最期だろうということ。幾度も幾度も繰り返してきた行方もこれでお終いだ。だから、起きろ、僕。

僕の瞳が映した君の瞳から、涙がポツリポツリと出てくる。本当に、

「泣き虫さんだなあ」

口を動かす。動かせることが分かってホッとする。

「だ、だってっ……」

「大丈夫。僕は居る。ずっと、ずっとと側に」

僕が見た幾つもの君の中で、一番不安そうだ。

「ああ、そうだ。訊きたいこと、あったんだ」

嘘だけど。今思いついた、訊きたいこと。

「なあに？」

「僕で、良かったのかな」

「ばか。逆だよ。あたしで良かった？」

死ぬ前に怒られたのは僕ぐらいだろうなあ。

「どうだろうなあ」

睫を伏せた彼女に追い打ちをかける。この際だ全部言っておこう。「情緒不安定さんだしちょっと強くなったと思ったら今度は僕を殴るし。そっちの強いじゃないって……また泣いてる。泣き虫だし」ポタポタ涙を流す。

「そ、そうだよね」

「それでも僕は良かったよ。顔可愛いし整ってるし髪長いし良い匂いだし声綺麗だし」

「ぜ、全部外見じゃないっ!!」

ククツと喉の奥で笑った。

「君で良かったんだ。君が良かったんだよ」

ふう。と大きく息を吐く。長い言葉言っだし、なんかまた眠くなってきたよ。

「手帳とペン、取ってくれないかな」

気力とか精神力とか、何でもいいのだ。力という力、全てを振り絞った僕は紙に素直な気持ちを書いておく。君の声は遠くなっている、視界だつてばやけてきて、紙に文字を書いているのかなんて判断できない。

「好きだよ」

そう言つて僕は笑う。君は泣くのをやめて微笑んだ。そして僕に分かるように、ゆっくりと口を動かす。

——あたしもだよ。ありがとう。

まだ声が聞こえる。まだ君の声が聞こえる。今だけは、僕だけの天使。この声を抱いて死ねるのなら、僕は幸せ者だ。

僕は、側に居ることが出来たのだろうか。実際の距離は、確かに近かったけれど、心の距離はどうだったのだろうか。分からない。喋れない僕は、訊くことができないから、分からないけれど、側に居られたと信じたい。そんな気持ちも書いておこう。震える手を支えるのは、柔らかいモノだった。柔らかな、君の手だった。

そして僕は目を閉じた。

覆い被さってきた君の身体を抱いて、僕は目を閉じた。

ずっと、ずっと、一緒なのだ。

永遠はないけれど、やっぱり、僕らの中に永遠はあったと思う。

今は亡き某国から最初の核が発射されて、数十年後。勃発してしまった核戦争時代を地下核シェルターの中で生き残った僅かな人々は、再び地上に出て生活を始めた。だが現在の働き盛りの若者は、語り手がほぼ消失してしまった核戦争時代や、その前の平和なときのことを知らないのだ。勿論私もその一人だ。そんな中で重要なことは、親から伝え聞く話しや、シェルターから発見された遺品だった。

特に、悲劇をもう二度と繰り返さないようにとの願いを込めて、核戦争を生きた人々のメモや手帳は、子供たちが学ぶ社会科の教科書に載ったり、出版社から売られたりした。

そして、さきほど私が見つけたシェルターで見つけたのは——二人の人骨だと思うが、抱き合うようにしてバラバラになっている骨と、ペンと、分厚い手帳があったのだ。

その手帳を初めから読んでいく。

そこには小説のような——一人の歌手と幼なじみを主人公に据えた自伝が書き込まれていた。一通り読み終わったあと、街に引き返した私は、僅かに残っていた当時を生きた人たちに訊ねてみた。

「昔、天使のような声を持った歌手は居ましたか？」と。

すると、誰もが知っていたのだ。となると、これは自伝だろう。

僕の視点で想い出を語っているので、自伝というより『他伝』か。それはともかく、想い出だけ語られているため、シェルターの中で起こった出来事が分からなかった。そこで私は、書かれていた内容から勝手に想像して書き加えてしまった。これで彼女のことが伝わるなら、彼も本望だろう。

……手帳の最後のページにこう書いてあった。

「どうか、彼女の軌跡をみんなに伝えて欲しい。一人の人間が生きた証を、僕は確かに残した。苦しみながら生きた『虹色の声』——彼女。名声と孤独を同時に手にした彼女に対する、僕の尊敬の気持ち

ち。『ずっと側に居る』って言うのは、死んでも尚彼女の生き様を残すことだ。……ここまで書いてきたけど、でもホントは、そんなことどうでもいいのかもしれない。僕は彼女と一緒に居られて良かった。だって、好きだから。優しい優しい天使さんのことが誰よりも好きだから。例えば彼女が『普通の女の子』だったとしても、別に構わない。だって、今聴いている、この優しい、この子守歌は、まぎれもなく、ぼくのだから。ぼくの――」

既にヨレヨレの字だった。恐らく、食糧が尽きて、意識も低下して、朦朧とした状態で書いたのであろう。ここからは乱れすぎていて読めない。だが、この手帳を読んだ私だから分かる。彼なら、きっと――『ぼくのこえ』と書いたであろう。最後にそう付け加えた私は様々な人に掛け合って一つの本を出版した。

天使、ワカナ、僕、……ああどれも違う。作中に何回か出ている彼女の代名詞。

勿論タイトルはこうだ。

『虹色の声』――

（後書き）

第18回電撃大賞一次落ちさっ！！

見てくださった方、ありがとうございました（・ω・）！

感想批判e t c……なんでもお待ちしております><

それではっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7585u/>

虹色の声

2011年10月9日10時38分発行